

防衛大学校本科第10期学生及び理工学研究科第3期学生 卒業式における学校長式辞（昭和41年3月19日）

本日、本科第10期生及び研究科第3期生の卒業式を挙行いたしましたところ、松野防衛庁長官^{注(1)}、吉田元総理大臣^{注(2)}をはじめ、内外多数の来賓ならびに卒業学生の父兄の皆様方のご参列を得ましたことは、卒業学生はもとより、われわれ一同にとり無上の光栄であります。

各位のご光来は、栄えある卒業式に花を添えるものでありまして、ここに衷心からお礼を申し上げる次第であります。

本科の諸君は、昭和37年4月、全国多数の志願者の中から選抜せられて入校し、爾来、この小原台上において、学問の研鑽に、はたまた体力・気力の錬磨に精進してこられました。また研究科の諸君は、昭和39年4月入校以来の2年間を、自衛官として必要な高度の科学技術の研究に努力せられたのであります。

いずれの諸君も多年の螢雪の功今やなり、本日、本校を去らんとしております。私は、諸君の卒業に満腔^{まんこう}の祝意を表しつつも、一面惜別の情禁じ難きものがあります。

研究科の諸君は、ただちに各部隊に帰り、それぞれ重要な任務につかれるのでありますが、本校において研鑽されました高度の科学技術を十二分に発揮され、それぞれ各自衛隊の進歩に貢献されるよう心から期待する次第であります。

第10期生の諸君、諸君の入校せられた昭和37年は、その年の秋、キューバ事件の発生した年であります。東西両陣営の対峙の中において、自由主義陣営が国際政治の主導権を回復した画期的な年であるといわれています。その後、中ソ対立の激化、米ソ関係の緩和、自由・共産両勢



第2代学校長 大森 寛

注(1) 松野頼三

注(2) 吉田 茂

力内における分極化、多極化等、国際情勢はきわめて複雑、流動的な様相を呈するに至り、最近においては中国^{注(3)}の核武装、ヴェトナムにおける紛争の激化等大事件が続発しております。

こういう難しい情勢下の4カ年を、諸君はこの小原台上において過ごされたのでありますが、諸君の学ばれたものはなんでありましょうか。諸君は、広い視野と豊かな人間性を培われました。科学的な思考力と基礎的な軍事学とを学ばれました。また強靱な体力、気力を錬成し、規律ある団体生活を体験せられました。これはすなわち本校教育の目標そのものであります。しかも諸君は、自己の立場を理解し、幹部自衛官たんとする自覚のもとに自ら積極的に努力せられたのであります。諸君が身につけた高い教養と錬磨した体力、気力ならびに規律ある生活態度は、立派な市民としての人間修錬であると同時に、新しい時代の国防の担い手として必要欠くべからざる基礎的資質であるのであります。

諸君は、いずれも立派にその課程を終えられました。本校建学の趣旨からいって本日のめでたい卒業式は、とりもなおさず自衛官としての新生活の開始を意味します。諸君は、ただいま陸・海・空の幕僚長から幹部候補生の任命を受け、その徽章を授与せられました。私は、諸君の新生活の^{かどで}首途にあたり、一言^{はなむけ}饒の言葉を贈りたいと思います。

自衛官の任務は申すまでもなく、わが国の防衛であります。しかして諸君の進むべき前途は、これからの新しい時代であります。諸君は、新しい日本を育成すべき立場にあります。

新しい時代における国防のあり方、民主主義時代における自衛官の心構え等については、過去の時代と違った新しい理念が必要であります。今後、国際情勢はますます複雑化するでしょう。また科学技術の進歩に即応して、わが国の防衛はいよいよ困難の度を加えるものと考えられます。諸君は、時代の変化に従い、新しい情勢に応じて創造的役割を果たさなければなりません。新しい時代における防衛問題の解決は、諸君の双肩にかかるといっても過言ではなく、私は諸君の前途に大きな期待を抱いております。

ここで申し述べておきたいことは、新しい問題への対処と同時に、諸君の忘るべからざることは、わが国古来の伝統の継承と、それに学ぶ態度が必要であるということでもあります。

わが国の平和と安全を脅かすものはいかなる事態であるのか、それは

注(3) 中華人民共和国

時代とともに変化するでありましょうが、近い将来において考えられることは、武力戦を中核とする脅威がもっとも大きなものであることについては、何人も異存のないところであると思います。

したがって、諸君の歩むべき道、自衛官としての道は、それらの事態にいかに対処するかということであり、その道は武人としての道であるといえると思います。新憲法においては、文武の区別を必ずしも明瞭にいたしておりませんし、また私は、ここで諸君が新憲法の文民か否かを問題にしようとは思っておりません。しかし諸君の職分の特質は、武人のそれであるのは疑いのない事実であります。私は武人には武人の道があると思います。そしてその本質は、昔からの時代を通じ変らざるものがあるのではないかと思います。古来の武士道や明治以降の軍人精神は、その特異な時代的背景の中で生れたものであり、その背景なくして考えられない面が多々ありますが、しかしその中には、時代の変遷を越えて、一貫する武人としての道のあることも認めなければなりません。

上代に芽生え生長した武人の道は、時に消長がありながら次第に形を整え、鎌倉時代、戦国時代を経て徳川時代に至り、さらに明治以降においても、その精神は父祖代々に受け継がれたものと考え得るのであります。

敗戦は、わが国に新しい時代をもたらす契機になりました。われわれは新しい情勢に応じ、過去の誤りを正すに逡巡いたしませんでした。しかし一部の人が考えるように、過去の時代のすべてが無価値なものではないのはもちろん、武人の道は敗戦とともに亡びたものではないと思います。

近時、平和を^{かつごう}渴仰するの余り、^し強いて旧時代に目をふさぎ、ために武人の本質についてまで、感情的にこれをゆがめんとするの風潮なしとします。その国の文化に誇りをもたぬ国民はなく、自軍の伝統を尊ばぬ軍隊は世界にありません。わが国に誇るべき武人についての歴史と伝統のあることを忘れるべきではないと思います。

諸君は、自衛官としての第一歩を踏み出すにあたり、それらの人々の良き伝統を継承し、それに学ぶの心構えをもってもらいたいのであります。新しい時代の国防を担うのは諸君のつとめです。そのためには、古きに学び新しきに対処するの覚悟が肝要であります。

本日、諸君は新しい制服に身を固めて、それぞれ陸・海・空の幹部候補生学校に赴かれます。諸君の前途は洋々たるものであります。しかし新生活の第一歩から、それは決して容易なものではありません。よくわ

が国内の状況は、東西両陣営の縮図であるといわれております。一部ではありますが、いまだに国防の基本方針を否認し、自衛隊の存在を認めようとしなない人々の存在することを否定し得ません。諸君は国防の担い手として、いわば対立する両陣営の接点上を歩いて行くべき運命を担っているともいえるのであります。いろいろな困難に際会^{さいかい}することを覚悟しておかなければなりません。しかし諸君の選ばれた道は、男子としてやり甲斐のある尊い生涯^{かくしゆ}をかける価値のある仕事です。陸・海・空の部隊には、諸君の赴任^{かきしゆ}を鶴首している多数の先輩がおります。また国民は、諸君に大きな期待を抱いております。私は、諸君が新しい生活の首途^{かどて}に、大きな誇りと自信とをもって前進せられんことを切望してやみません。

これをもって式辞といたします。